



品質、収量、規格を揃えるなら、やっぱりF1を!

「F1」の種について

ブランド果樹など新品種の農作物の海外流出防止を目的に「改正種苗法」が12月の参院本会議で可決、成立しました。選ぶ種によって収量や規格の揃いが大きく変わるため、多くの生産者が「F1」を利用しています。

生産者にとって大切な「種」。今回は、「改正種苗法」によって関心が高まる「種」についてご紹介します。



【編集担当】
営農振興課
荒川 恵梨奈

「教えて! 営農さん」では、農産物の栽培に関する情報をお届けします。

「F1」の種とは

異なる形質を持つ親をかけ合わせると、その第一代の子(F1)は、両親の形質のうち優性だけが現れ、劣性は陰に隠れるというメンデルが発見した「優劣の法則」を利用して作られた種のことです。この種を「F1」や「一代雑種」「交配種」「ハイブリッド品種」などと呼んでいます。

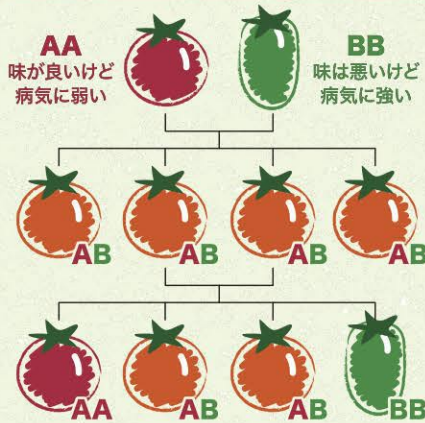
※異なる二者をかけ合わせた時、表面に出る方を「優性」、隠れる方を「劣性」といい、どちらかがもう一方より優れた性質であるということではありません。

現在、流通するほとんどの野菜類は「F1」の種が使われています。ただし、高品質で均質な収穫物が得られる「F1」同士をかけ合わせても、「優劣の法則」により多様な形質が現れるため、不揃いの収穫物となってしまう可能性があります。なお、今回の「改正種苗法」施行後も、在来種・固定種を自家増殖することは可能です。

「F1」のメリット

- 発芽や生育の揃いが良いため、市場に出荷しやすい。
- 耐病性の品種など、常に改良されているので、特定の病気を避けやすい。
- 品種改良されているので、味にクセがなく、食べやすい。

種の交配図(トマトの例)



親世代
異なる形質の品種を交配させる

F1
味が良くて病気に強い

F2
F1同士を交配させると多様な形質が現れる

JA広島市では、安心して営農できるような古い種や発芽率の低い種の提供は行っていません。収量が見込め、同じ規格で収穫したい場合は、必ず「F1」の種を選んでください。



1 種まき

種から育てる場合は育苗ポットで

育苗ポットに培養土を入れ、種を4〜5粒まく。生長に応じて間引き、生育のよい1株を本葉が4〜5枚になるまで育てる。

2 植え付け・追肥

肥料は定期的に施す

コンテナに鉢底石を入れ、8分目まで培養土を入れる。育苗ポットから根鉢を崩さないように苗を取り出して植え付け、たっぷり水やりする。植え付けから2週間後、化成肥料をまき、土と軽く混ぜ合わせて根元に土寄せしておく。

3 収穫

葉が立ち上がったなら収穫適期

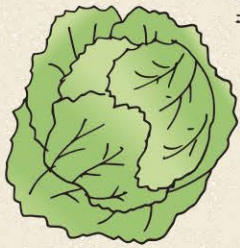
中心の葉が立ち上がって結球したら収穫適期。やや固く締まったら、外の葉を1〜2枚残して株元から切って収穫する。

冷却で乾燥した気候ですくすく育つ
レタス
サラダのイメージがあるレタスですが、油と一緒に食べることでレタスに含まれるカルシウムやカロテンの吸収率が上がるといわれており、炒め物や鍋などの加熱調理にもおすすめです。

結球して締まったらOK

根鉢は崩さない

本葉が4〜5枚になったら植え付け



ここに注意

● 日照不足や気温が高すぎる、または低すぎるなどで結球が固くならないことがあるため、収穫は様子を見ながら判断しましょう。

栽培のポイント

- 土の量と日差しをしっかりと確保する
- 根が弱いため、水はけをよくしておく

参考文献: コンテナでつくるはじめての野菜づくり(新星出版) からだにうれしい野菜の便利帳(高橋出版)

用意するもの

- 種 ● 育苗ポット ● 培養土 ● コンテナ
- 鉢底石 ● 化成肥料

栽培カレンダー

12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
				種まき					
					植え付け				
									収穫

